未来見すえ復興考えた

福島の中学生、熊本・水俣で生徒交流学習会

班別「熟議」熱く、楽しく

記念に桜植樹 10年後再会も

なごやかに進む「熟議」

「水俣は終わらない、福島は歩み出す」「地元を信じて」――。真剣に話し合い、選び抜いた言葉が次々と飛び出します。福島県と熊本県水俣市の中学生合わせて63人が「復興」をテーマに六つの班に分かれて取り組んだ「熟議」の発表会です。クリスマス返上で語り合った14歳たちの瞳は未来を強く見つめていました。

昨年12月23～26日、水俣近郊の「あしきた青少年の家」などを会場に、福島・水俣交流事業「生徒交流学習会」が開かれました。公害から立ち上がり新たな街づくりを続けてきた水俣の経験と、震災・津波・原発事故の痛手から、一歩を踏み出そうとしている福島の現実。その両方を伝えあい、次代を担う中学2年生に復興を考えてもらいたいと、福島県PTA連合会・水俣市PTA連絡協議会による実行委員会が開催しました。

ベルマーク財団はその趣旨に賛同し、3回目となる今回、50万円を寄付しました。

福島全県から集った生徒39人は23日に熊本入り。翌日バスで水俣に移動し、まずエコパーク水俣を見学しました。水俣病の原因となった有機水銀を含むヘドロや汚染された魚を埋め立てて作った、東京ドーム13個半分の広大な公園です。その上を歩き、慰霊碑に黙祷を捧げることで、教科書でしか知らなかった公害病のイメージが一気に身近になりました。

記念の桜の植樹（ベルマークの桜も植えられました）などを終え、この日が終業式だった水俣勢24人と青少年の家で夕方に合流。福島・水俣混成の班分けに沿って食事やお風呂、寝る部屋も一緒です。

しっかり学習もしました。「環境の街づくり」を進めた前水俣市長と水俣病の語り部から、公害の苦しみや、現在までの歩みを聞きました。福島の飯舘村立飯舘中、福島市立松陵中の生徒からは、この4年半の暮らしや復興への取り組みが報告されました。

25日の朝からはいよいよ、班別ディスカッションの「熟議」。「風評被害」という言葉があちこちで飛び交います。一方で福島産食材への「抵抗感」や「不安」といった〝本音〟もちらほら聞こえます。テーマ別に班をさらに二つに分けたり、ポストイットや図形で議論を整理したり。夜の発表会に向け、復興と自分たちとの関わりが、どんどん明確になっていきました。

討議の合間には、美しい不知火海でペーロン船を漕いで気分転換もしました。ゆるキャラ・くまモンのサプライズ激励にはもう大騒ぎです。熱く、楽しく、工夫を凝らしたプログラムで充実した時を過ごし、友情を深めた生徒たちは、10年後に植樹した桜の下で再会することを約束。そのための幹事さんまで決めて発表会を終えました。

生徒たちはこの後、今回の経験を踏まえた一人一人のアクションプラン作りに取り組みます。（今村修）

記念の桜を植えました

ベルマーク財団、50万円を寄付

出前授業各地で

昨年10月から12月にかけて、へき地校を支援するベルマーク財団の「出前授業」が全国各地で開かれました。ベルマーク預金を使う「教育応援隊」も利用されています。開催校は以下の通りです（財団ホームページに各校のリポート）。

【一輪車講習会】

愛媛県・砥部町立高市小学校（10月21日）＝「ステージを伝って前に進めた」と6年の立田玖珠さん。近くの広田小学校も参加▼宮城県・大崎市立真山小学校（11月12日）＝「ホンモノの技や人にふれ、ステキな経験に」と大竹恵子校長。

【理科実験教室】

和歌山県・有田川町立八幡小学校（10月20日）と西ケ峯小学校（同21日）で「クモ観察会」＝クモの巣の標本を作って「家に飾っておく」（八幡小）。クモをルーペで観察し「きれいやなあ」（西ケ峯小）▼滋賀県・甲賀市立多羅尾小学校（12月9日）＝音、空気、温度などを「見る」実験。先生たちも夢中に▼大阪府・茨木市立忍頂寺小学校（12月17日）＝雪崩の専門家、ナダレンジャーが防災の大切さを実験で訴えました。

【教育応援隊・科学実験ショー】

大阪府池田市立の小中一貫校、ほそごう学園細郷小学校・中学校（11月15日）＝テーマは「空気のすご～い力」。地域と学校をむすぶ文化祭で開催、地域の人も参加。

【上履き方教室】

栃木県・日光市立足尾中学校（10月19日）＝「なにか筋力が戻ってきた感じ」と3年の安塚憂衣（ゆい）さん▼宮城県・石巻市立大須小学校（10月30日）＝「校内持久走大会では学んだことをいかして頑張ります」と6年の阿部李花さん。同じ校舎で学ぶ大須中学校も参加▼静岡県・浜松市立春野中学校（11月25日）＝「生徒たちの目つきが変わりました」と、甲子園の選抜高校野球で優勝経験がある山下修平校長▼熊本県・八代市立泉中学校（12月14日）＝「腰と肩甲骨を意識して走ることの大切さがわかりました」と陸上部2年の橋口尚平君。

【教育応援隊・ミズノ走り方教室】

東京都・豊島区立池袋第一小学校（10月24日）＝土曜日、低学年と高学年の2回に分けて行われ、計155人が参加。

歴史閉じる校舎、見えたものは

【教育応援隊・アート教室】

長崎県・南島原市立慈恩寺小学校（11月17日）＝周囲をしっかり観察する「気づき」と「創造」をテーマにしたアート教室

は、ベルマークでは初登場。同校は今春、統合で歴史を閉じます。児童たちは校内をくまなく探検、創立からの年数「141」＝写真上＝と児童数「24」などの数字を身近なモノを使って表し、カメラに一枚一枚収めました▼青森県・八戸市の八戸めぐみ幼稚園（10月16日）＝色とりどりのビニール地と底面のブルーシートを貼り合わせて袋状にし、空気を送り込んで作るクジラのエアドームに挑戦しました＝写真下＝。

【教育応援隊・科学実験教室】

長崎県・島原市立鷲宮（かみさぎのみや）小学校（12月3日）＝自分でデザインと色彩を考えて挑む、世界に一つしかない凧（たこ）づくり。61個の連だこがきれいな曲線を描いて揚がりました＝写真下。

【教育応援隊・絵本を届ける運動】

東京都・北区の女子聖学院中学高等学校（10月9日）＝初めてこの運動に参加し、ベルマーク委員40人が取り組みました。子どもの絵本が足りない国や地域へ、日本語の絵本の文字部分に現地語の翻訳シールを貼って届けるボランティア活動です。

この日はラオスの公用語ラオ語のシールを貼りました。

ふるさとに誇りと愛着

熊本で全国へき地教育研究大会

第64回全国へき地教育研究大会（文科省、熊本県教委、全国へき地教育研究連盟主催）が10月15、16の両日、熊本県内で開かれました。全国各地のへき地校や小規模校、複式学級のある学校の校長ら教育関係者十人余りが集まり、同県内のへき地・複式の12校で、学習の取り組みなどについて視察し、意見を交わしました。ベルマーク財団からも中島泰常務理事が参加しました。

阿蘇五岳のふもと、南阿蘇村立両併（りょうへい）小学校（後藤利恵子校長）の1年生は児童8人のクラスです。童話の「くじらぐも」を題材にした国語の授業がありました。

担任の梶原さおり先生が「雲のクジラに乗った1年生の子どもたちは、どちらの方へ行きましたか」と尋ねると、児童たちは「海の方へ」「村やまちの方へ」と手を挙げて次々に答えていきます。「海では船が見えると思います」「村には畑やトラクター、山がありますまと想像を膨らませた答えに「いいと思います」の声が続きます。児童たちは、友だちの意見を聞き、自分の考えをはきはきと発表しました。

同校は、1、2年生が単式学級、3・4年と5・6年が複式学級の計4クラス38人の小規模校です。同じく国語の公開授業をした3・4年生クラスでは、3年生と4年生が背中合わせに着席しました。3年生は「ちいちゃんのかげおくり」、4年生は「ごんぎつね」の場面の移り変わりをとらえながら、考えたことを話し合いました。

視察した教員の一人は「教諭と学習支援員が入れ替わりながら2学年同時進行の授業ですが、事前の学習計画がしっかりと立てられていないと、あのようなスムーズな進行はできません」と話していました。

もう一つのテーマは「ふるさとを見つめる」です。5・6年生12人は総合学習の時間に3グループに分かれ、地元の農家と養蜂家、農業後継者を訪ねて話を聞き、メモや写真、動画を撮りました。地域の方々と直接ふれ合い、郷土の素晴らしさを学んでいました。

2年生は図工です。絵具を含ませたローラー式のスポンジやガーゼを、くり抜いた型紙の上から押しつけて、ふるさとの風景を仕上げました。

大会初日は熊本市で全体会が開かれ「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓（ひらく）く子どもの育成」をテーマにした基調報告や、同県出身で全日本柔道連盟副会長の山下泰裕さんの記念講演などがありました。（桜木正彦）

財団見学

▼神奈川県藤沢市立八松（やまつ）小学校PTAの学級委員会ベルマーク班、佐川由紀子さん＝10月15日。「ベルマーク預金でお買いものをすることが寄付につながるということを改めて認識し、ベルマーク活動に対する意識が一層高まり、理解を深めることができました」

◇

ベルマーク財団では随時、見学を受け付けています。申し込み、問い合わせは広報部（電話03・5148・7253）へ。

食べておしゃべりして発散、静かに自習

ゾンタハウス 居場所を提供

「寺子屋」支援

自習の前にまずは腹ごしらえして、おしゃべり

山田町ゾンタハウス

夕暮れどき、制服やジャージー姿の生徒たちが三々五々集まってきました。学校が終わって腹ぺこです。まずは石油ストーブの回りで、スタッフお手製のサンドイッチやパンをほお張り、おしゃべりに花を咲かせます。やがて2階に上がり、自習が始まりました。

海に面した岩手県・山田町の中心部にある山田町ゾンタハウスは、大震災で被災した生徒の居場所を提供しています。ベルマーク財団が今年度始めた「寺子屋」事業支援の対象の一つです。昨年11月に訪ねました。

山田中学校や山田高校などの生徒がやって来ます。多いときは40人ほど、平均でも20人近くになります。

高1の上沢りえさんは「パンがおいしいし、勉強のわからないところを教えてもらえる」といいます。仲良しの小林未空さんや湊日和さんと一緒です。湊さんは看護師になると思ってから俄然、勉強のモチベーションが上がったそうです。

仮設住宅では隣近所に遠慮した生活を強いられます。「いろんな学年の仲間や大人に触れ、しゃべり、相談し、ふざけて発散する。そして勉強」。ハウス代表で勉強の面倒も見る竹内範子さんや実務責任者の佐藤恵理子さんらは「寺子屋」の効用をそう語ります。

東洋大学などの学生も長期休みにボランティアとして加わります。

被災地では一般に、学力の低下や中退問題などに悩んでいますが、ハウスには、大学進学を目指したり復興に貢献したいと思ったりする子も出てきました。

山田町は地震と津波、火災で甚大な被害に遭いました。復興の途上にあり、子どもたちのケアも必要です。「ここに来る子たちがいる限りハウスを続けたい」。竹内さんは話していました。（小菅幸一）▼1面参照

山田町ゾンタハウス代表の竹内範子さん（左）と実務責任者の佐藤恵理子さん

背中合わせで授業を受ける複式学級の3・4年生